

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the suspended usage of the negative auxiliary nai

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金沢, 裕之, KANAZAWA, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001970

助動詞「ない」の連用中止法について

金 沢 裕 之

(岡山大学)

キーワード

助動詞「ない」、連用中止法、「～なく」中止形、状態性、通時的変化

要 旨

動詞の否定の連用中止法は、一般には、「～(せ)ず、…」の形が正しく、助動詞「ない」を使った「～(し)なく、…」の形は規範的でないとされている。しかし近年、一部の用例にはあるが、この形式が認められ、それらの用例を観察してみると、先行する動詞句、あるいは「動詞+ない」全体が状態的な意味を表す場合に多く用いられていることがわかった。大学生に対するアンケート調査でも、この観察の妥当性が概ね確認された。この現象を通時的変化の流れから考えると、否定の助動詞における「ず」から「ない」への移行が最終的な段階を迎えようとしていることの予兆として捉えられる可能性がある。

1. はじめに

動詞の否定の連用中止法は、一般には、「～(せ)ず、…」の形が正しいとされ、助動詞「ない」を使った「～(し)なく、…」の形(以下、「～なく」中止形と略記)は、規範的でないと考えられてきた。例えば此島正年氏は『国語助動詞の研究』(p.167)において、次のように述べている。

連用形「なく」の中止法は、形容詞にはあるが、助動詞にはない。——「勉強する気がなく、遊んでばかりいる」とは言えるが、「勉強をしなく、遊んでばかりいる」とは言えない。中止法には「勉強をせず、遊んでばかりいる」と「ず」を用いるのである(ときに「なく」の中止法を文章に見るが、ぎごちない)。(第三章第二節「ない」の項)

しかし、此島氏が括弧の中で述べているように、「～なく」中止形は全く使用されないというわけではない(ただし此島氏自身は実例を提示していない)。以下、一部山内博之氏の協力を得て筆者が見つけた例を、書き手別(ほぼ時代順)に列挙してみよう。

- (1) この時遊撃手捕球後一瞬ためらっている間に二塁走者木村も一挙ホームを衝いたが、このとき本塁上には捕手はいなく木村の快走でこの回二点をあげて優位に立った。

(朝日新聞, 1955年4月6日)

- (2) あとは黙々、陰々滅々、気まずく落ちつかなく、なるべく相手と視線を合わせぬよう一気にメシを平らげ、…

(東海林さだお『ショージ君の「さあ!なにを食おうかな」』平凡社, 1975年)

- (3) 最初は何の味もしなく、一体これからどうなるのだろう、と少し不安になるが、辛抱強く噛んでいるうちに少しずつバラバラになり、…

(同上『キャベツの丸かじり』朝日新聞社, 1989年)

(4) 正妻たちの立場も、皇太子の母以外は安定していなく、寵妃と入れ換えられることも珍しくはなかった。
(塩野七生『イタリア遣問』新潮社, 1982年)

(5) 絶対主義的思考法をたたきこまれた者は、それがなくなって自由になっても、その自由を生かすことができなく、結局もう一つの絶対的なものにすがりつくしかない、…
(同上『サイレント・マイノリティ』新潮社, 1985年)

(6) 他人を強制し服従させる力や、治者が被治者に服従を強要する力は、権力の一面にすぎなく、それをする人は、権力者の一部にすぎない。
(同上)

(7) キケロよ、あなた以上に祖国ローマを愛する者はいなく、あなた以上に祖国ローマの基盤である自由の守護者たるにふさわしい人はいない。
(同上『ローマ人の物語V』新潮社, 1996年)

(8) この定義でも、やはり二つの実体が係わっているが、それだけでは足りなく、その二つが、ここに出てくる「動作主」と「対象」というような、特定な関係になければならない。
(ウェスリー・M・ヤコブセン「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版, 1989年)

(9) くつつきの度合いが低い場合は、[B] [D] [E] のテストをパスできなく、[C] の省略のテストにおいて全体のノ格を省略しても文の充足度が落ちない。
(丁意祥「直接受身としての〈非分離性関係の受身〉」『大阪大学日本学報15』1996年)

(10) 過去や過去完了の表現はなされていなく、過去のことでもない。
(学生のレポート。1996年)

(11) この言葉を理解できなく、習得し得ないということ。
(学生のレポート, (10) とは別人物。1996年)

(12) 草稿等にはあっても、正式に書かれたものには認められなく、口頭における不注意によるものが殆どである。
(田中真理『ヴォイスに関する中間言語研究』—平成7年度科研費研究成果報告書, 1996年)

(13) 平成6年1月と言えば、道内の日本語教育の実態もあまり知られていなく、地元では大学における留学生への教育が日本語教育の代名詞であった。
(中川かず子「北海道における日本語教育と地域のネットワーク」『日本語教育・異文化間コミュニケーション』凡人社, 1996年)

(14) その目的も意識も多様であっても構わなく、むしろさまざまな創造的な考え方が持ち込まれて組織自体が活気づくものであるから、…
(同上)

(15) 「ネットワーク」の会員も、この先どのようになるかは予想もつかなく、不安な気持ちに陥ることもあるかもしれない。
(同上)

(16) 全国でも注目の選挙区だ。街頭には両候補らのポスターがはられ、選挙カーが駆け抜ける。“新住民”がほとんどいなく、支持政党の色分けもはっきりしている。

(朝日新聞, 1996年10月17日)

(17) しかし今石 (1993) では、「聞いていること」だけを伝えるあいづちは存在しなく、「理解していること」を伝えるものとしている。 (学生の卒業論文。1997年)

以下では、これらの「～なく」中止形に見られる特徴、及びこのような新しい中止法が出現する背景について、少しく考察を行なってみたい¹。

2. 用例に見られる特色

ここでは、前節で挙げた17の用例について、その特色を考えてみることにしたい。

上の17例の「～なく」中止形は、その上接する動詞(句)の特徴から、以下の6種類に分けることが出来る。

A. 動詞「(～)する」

(3)「味もしなく」、(17)「存在しなく」

B. 動詞「いる」

(1)「捕手はいなく」、(7)「ローマを愛する者はいなく」

(16)「“新住民”がほとんどいなく」

C. 動詞「できる」

(5)「生かすことができなく」、(9)「パスできなく」

(11)「理解できなく」

D. 補助動詞「いる」(「～ている」)

(4)「安定していなく」、(10)「なされていなく」

(13)「知られていなく」

E. 動詞+助動詞「られる」

(12)「認められなく」

F. A～E以外の動詞(句)

(2)「落ちつかなく」、(6)「一面にすぎなく」、(8)「足りなく」

(14)「構わなく」、(15)「予想もつかなく」

さて、ここに示した動詞(句)については、その特徴として次の二つの点が指摘できるのではないかと思う。第一に、動詞(句)が状態的な意味を表すケースが少なくないということ。そして第二には、Fに分類したもののうち、(6)「…にすぎない」、(14)「…でも構わない」は、対応する肯定形「*…にすぎる」「*…でも構う」を持たない、ということである。以下、この二点について少し具体的に検討してみたい。

まず第一の点について言うと、B「いる」・C「できる」は典型的な状態述語であるし、D「～ている」も「動作の継続」「結果状態」といった状態的な意味を表す形式である。また、A「(～)する」に分類した「味がする」「存在する」、及びFに分類したうちの(8)「足りる」も、基本形が現在の状態を表わし得るといって状態述語的な側面を持っている。Eに分類した「認められる」も、この場合は「存在が感知される」くらいの意味で用いられており、やはり基本形が現在の状態を

表し得るという点で状態述語的である。更に、Fに分類したうちの(15)「予想がつく」も、全体として「この場で予想することができる」という状態的な意味を表す表現になっていると考えることができる。(2)「落ちつく」のように、動詞自体は状態的な意味を表すとは言えないものもあるが、相対的に見て、先行する動詞(句)が状態的な意味を表す場合の方が「～なく」中止形が出やすいということは言えそうである。状態的な意味を表す述語の典型である形容詞の否定の連用中止形が「～なく」(例：高くなく、美しくなく)であることからの類推で、「～なく」中止形が出やすいという可能性も考えられよう²。

次に、第二の点について言えば、「*…にすぎる」「*…でも構う」という肯定形がないということは、否定形「すぎない」「構わない」が状態的な意味を表す定型的な表現になっているということである。やはり、形容詞の否定形の連用中止形が「～なく」となることからの類推で、「～なく」中止形が出やすくなるということなのかもしれない。(2)「落ちつかない」も、全体として「精神状態が不安定である」という状態的な意味を表すために、「～なく」中止形が出やすくなるということが考えられる。)もともと、「…にすぎず」「…でも構わず」という中止形が存在する点は形容詞とは異なる。また、同じく対応する肯定形を持たない定型的な表現である「物足りない」の場合は、「物足りなく」という連用形が自然であるが(例：物足りなく思う)、それに比べると「すぎなく」「構わなく」という連用形は自然さが落ちるように思われる(？…にすぎなく思う、？…でも構わなく思う)。「物足りない」は形容詞性が高いが(実際、形容詞として認定している辞書もあるし、「物足りなく」という連用中止形を認定する人は多い)、「…にすぎない」「…でも構わない」は形容詞性が低いということかもしれない。

3. 大学生を対象としたアンケートの結果

前節では、先行する動詞(句)、あるいは「動詞+ない」全体が状態的な意味を表す場合に「～なく」中止形が出やすいということが言えそうだと述べたが、「～なく」中止形の現時点における使われ方(許容度)を知るために、アンケートを行ってみることにした。アンケートの対象としては、大量調査のしやすさ、及びこの種の用法が生まれている可能性として中高年層よりも若い世代の方が高いと考えられることを考慮して、大学生を選んだ。その実施の方法としては、まずはこうした用法が彼らに実際に使用されつつあるのかどうかということを知るのが第一と考え、既にある用例を利用した文脈を設定した上で、問題の部分を空白とし、そこに彼らにとって自然な表現形式を記入してもらうという形式をとった。

アンケートは1996年11月、岡山市内の三つの大学で実施した。対象となった学生は全体で634名(女子428名、男子206名)である。(調査の意図を探られないように、質問項目にはダミーの問題もある程度混ぜた。)なお、記入の仕方についてはこちらからは特に細かい注意は与えず、文脈から判断して空白を埋めてもらうという方法をとったので、原因・理由の表現にしたものや意味の通らないもの、更には方言形での回答などがある程度の数(全体の約7.5%)見られたが、それらについては考察の対象から外した。(以下の表の中で「計」の数字が異なっているのはそうした事情による。)

そこで提示した具体的な例を先に示すことにしよう。

- (a) 最初は何の味も (), 少し不安になったが, 次第に本来の味が出てきた。
- (b) この地区には新しい住民はほとんど (), 人々はみな家族同様の付き合いをしている。
- (c) その言語は, 構造を簡単に理解することができ (), 習得も難しい。
- (d) 当時は運動の実態もあまり知られて (), 協力する人は少なかった。
- (e) 懸命に頑張ったが, 我々の抗議は認められ (), 得点も入らなかった。
- (f) 新しい政府がどのような方針で対処するかは予想もつか (), 不安な気持ちに陥ることも多い。
- (g) コンニャクは包丁で切ら (), 手でちぎった方が, 味がよくしみます。

(a)~(f) は, 前節でA~Fの6種類に分けた例の中から1つずつを選び, それを部分的にアレンジしたものであり, (g) はそれらと性格的に異なると考えられる例を, 寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』(p.218)の例文を参考にして一つ加えたものである。

アンケートの結果は以下の通りである (括弧内は割合 (%))²。

	(c) ～ができ-	(e) 認められ-	(f) 予想もつか-	(g) 包丁で切ら-
ず	436 (85.0)	598 (96.0)	531 (87.9)	275 (44.1)
ずに	2 (0.4)	3 (0.5)	7 (1.2)	221 (35.5)
なく	15 (2.9)	9 (1.4)	31 (5.1)	-
なくて	13 (2.5)	13 (2.1)	20 (3.3)	-
ないし	47 (9.2)	-	15 (2.5)	-
ないで	-	-	-	127 (20.4)
計	513	623	604	623

	(b) 住民は-	(d) 知られて-
おらず	384 (64.1)	288 (55.7)
いず	46 (7.7)	13 (2.5)
いなく	39 (6.5)	30 (5.8)
いなくて	32 (5.3)	16 (3.1)
なく	95 (15.9)	132 (25.5)
なくて	3 (0.5)	38 (7.4)
計	599	517

	(a) 何の味も-
せず	334 (57.4)
しなく	15 (2.6)
しなくて	33 (5.7)
なく	167 (28.7)
なくて	32 (5.5)
しないで	1 (0.2)
計	582

さて、今回注目している「～なく」中止形に焦点を絞ってみると、その記入（使用）状況については、次のような結果が導き出せることになる。

	住民はいー (b) >	知られていー (d) >	予想もつかー (f) >	～ができー (c) >	何の味もしー (a) >	認められー (e) >	包丁で切らー (g)
割合(%)	6.5	5.8	5.1	2.9	2.6	1.4	0.0
人数(人)	39	30	31	15	15	9	0

ここで一つ確認しておきたいのは、今回のアンケートはあくまでも空欄への記入方式であり、筆者が注目している「～なく」中止形については何らの予備知識や先入観を与えたものではないということである。そうした状況の中で、一割未満とはいえ、一定数の学生たちが「～なく」中止形を選んでいるということは、「はじめに」で挙げた(1)～(17)のような例が決して単なる言い間違いではないことを示唆していると考えられる。「～なく」中止形の許容度に関する本格的な意識調査はまだ行っていないが、(a)～(f)のような場合の「～なく」中止形が(自然なものとして)許容できる範囲のものであるかどうかを尋ねたとしたら、それへのYESの答えの割合は、今回の数字をはるかに上回るものになるであろうことが予想され、実際にアンケートの後ある程度の日数を置いて、72名について意識調査を行なったところ、例(d)の「～なく」中止形(「知られていなく、…」)については、28名(38.9%)の学生が特に不自然ではないと回答した。

また、今回のアンケートに補足的に加えた(g)「包丁で切ら()」の場合、600名を超える回答者の中に、ただの一人も「～なく」中止形を記入した者がいなかったことも注目される。言うまでもなく、(g)で利用した動詞「切る」は状態的な意味を表さない動詞であるが、そうした動詞の場合には「～なく」中止形は(現時点では)採り入れられていないことがアンケートの結果からはっきりしたと言える。この点についても、同じ72名について意識調査を行なったところ、次の(h)については全員が不自然だとしたが、(i)については、約4割の者が許容できると答えた⁴。

(h) 山では雨が降らなく、雪が降った。(佐治1982の例文参照)

(i) 雨音がするので外を見ると、雨はさほど強くは降って~~いなく~~、傘なしでも歩けそうだった。

アンケートで「～なく」中止形が記入された割合において、(b)「いる」及び(d)「～ている」の場合が上位を占めていることについては、(典型的な状態表現であることに加えて)「～いなく／～おらず」のように、「ない」「ず」のいずれが後続するかによって先行する動詞の形が異なるということも関係しているかもしれない。動詞「おる」は、現在では敬語や方言形としての場合を除いてあまり使用されることがなく、補助動詞としての「～ておる」も、まだかなり使用されるとはいうものの、その勢力は徐々に弱まりつつあるように思われる。動詞の部分に新しい形である「いる」を採用した場合に、助動詞の部分もそれに応じるかたちで(古い「ず」ではなく)新しい「なく」を接続させる(その方が落ち着きがよい)ということも、一つの可能性として考える

べきではなかろうか⁵。(a)「何の意味もしなく、…」についても、「～しなく／～せず」というように、「ない」「ず」のいずれが後続するかで未然形の形式が異なるということが関係している可能性はある。ただし、この点については、「勉強をする」のような状態性を持たない「する」について、「勉強をしなく、…」のような形がどれだけ許容されるかということを調査する必要がある。)。

4. おわりに

寺村秀夫氏が『日本語の文法 (下)』の中の並列接続に関する部分 (p.34) において、今回問題としたテーマと関わる重要な指摘をしているので、その部分を先に掲げてみることにしたい。

これまで並列接続のいろいろな形を見てきたが、その中では「～し」という連用形による接続と、「～して」という形によるそれとは一応同類として扱ってきた。しかしこの二つの形の間にもいくらかの違いがあるようである。それを考えるに先立って、動詞、形容詞、(名詞またはナ形容詞+)ダのそれぞれについてこの両方の形を整理しておこう。そしてこのついでに、まだ特にとりあげていない否定の形も見ておこう。

		動 詞	形 容 詞	一ダ
連 用 形	肯 定	行キ	アツク	(雨ニ)
	否 定	(行カナク) 行カズ	アツクナク	雨デナク
テ 形	肯 定	行ッテ	アツクテ	雨デ
	否 定	行カナクテ 行カズニ 行カナイデ	アツクナクテ	雨デナクテ

「雨に」と「行かなく」をカッコに入れたのは、「なる」にかかる限られた連用法だけで、普通には並列接続には使われない (しかし形の体系の中ではここに位置づけられる) ためである。(下線引用者)

この寺村氏の指摘からも明らかなように、「～なく、…」という形の動詞の否定の連用中止法は、並列接続の体系全体から考えると、合理的な説明がつく用法であることがわかる。「なる」にかかるといふ「限られた」ものではあっても、確かに用法自体は従来から存在していたのであり、こうした点から考えると、古い用例の出現についても、それなりに納得することができるのである。現時点では「～なく」中止形の使用に関する歴史的な状況については十分な調査ができておらず、「～なく」中止形が近年増加傾向にあるのかどうかもはっきりとはしない。ただし、此島氏や寺村氏のことはある通り、この用法がこれまで規範的でなかったことは明らかであり、にもかかわらず、筆者が調べた限りでは、ここ十数年程の間に目に付くようになってきた現象については、大いに注目する必要があると考えられる。

また、本稿では、先行する動詞句、あるいは「動詞+ない」全体が状態的な意味を表す場合に

「～なく」中止形が現われやすいらしいということを指摘したが、このことが今後の調査などによって確かめられるとするなら、形容詞により近い（すなわち状態的な意味を表す）動詞から従来のルールが崩れ始めている（すなわち将来「ず」が消滅し「ない」に一本化される可能性がある）ということになり、否定形式の歴史的変化という観点からも非常に興味深い現象となる。

寺村氏の言及にもあるように、テ形と連用形の関係については微妙であり、連用（中止）形をテ形の「て」の部分落ちたものとする見方（寺村氏の表に倣えば、タテの系列の変化）も可能であろうが、（成立の過程としては）もし仮にそうであったとしても、結果的に成立した連用形がその形で落ち着き得るものだとしたら、その背景にはやはり連用形そのものが本来持つ中止法としての働き（表のヨコの系列）の存在を考えなければならないのではなからうか。

今後の状況については予断を許さないが、筆者としては「～（し）なく、…」という形の連用中止法が今後次第に容認されてゆくのではないかという期待も抱きつつ、推移を注意深く見守ってゆきたい。

注

- 1 今回は話を書きことばに限定するが、話しことばにおいても同様の現象は起こっているようである。また（8）と（9）は外国人による文章の例であるが、他に誤用らしき箇所が見当たらないことからしても、単なる間違いとは考えにくい。
- 2 意味的に形容詞に近いものが文法的にも形容詞に近い振る舞いをするということは、井上史雄氏が「新方言」に関する研究（井上1985）の中で「何しろ動詞を形容詞的に活用させているのだから、『誤用』と非難されても仕方のない現象」（p.28）として挙げている「チガカッタ（違かった）」のような例についても当て嵌まる。井上氏も、この形が現われた言語的理由として、日本語における「品詞と意味の不一致」ということを指摘した上で、「（「チガカッタ」は一引用者注）恐らく意味的に形容詞的であるところから存在しているのだらう」（p.256）と述べている。
- 3 （a）及び（b）（d）の場合には、ブランクの中に動詞や補助動詞の部分も記入されるので、別の表で示す。なお、アンケートの実施に当たっては、江口泰生、佐久間毅、永田靖、三宅ちぐさ、湯浅茂雄の諸氏の協力をいただいた。
- 4 Eの場合（動詞+助動詞「られる」）に関しても、筆者自身の感覚では、次の「認めなく」は許容できないが、「認められなく」の方は許容可能である。
 - * 当局はその方針を認めなく、金銭的な援助も行なわなかった。
 - ? その方針は当局に認められなく、金銭的な援助も行なわれなかった。
- 5 「いる」「～ている」については、「いず」という新旧混合の形が見られる。
 - ・ネクタイ姿は一人もいず、タオルのはち巻き、ジャンパーに長靴という正装が圧倒的に多い。
（東海林さだお『ショー君のぐうたら旅行』、文芸春秋、1973年）
 - ・今のところ復帰のめどはたっていない、このままユニホームを脱ぐかもしれない」と話す球団幹部もおり、…
（朝日新聞、1996年9月11日）もっとも、「おらず」に比べると、「いず」は落ち着きが悪いように感じられる。（この点につい

ては、本動詞に関する言及であるが、三上（1955）及び金水（1996）を参照。）三上氏は、肯定の中止法についても、多分「シラブルの関係」から（「い」よりも）「おり」が使われる、と述べている。

参考文献

- 井上 史雄（1985）『新しい日本語—《新方言》の分布と変化—』明治書院
- 金水 敏（1996）『『おる』の機能の歴史的考察』『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院
108-132
- 金田一 春彦 編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 此島 正年（1973）『国語助動詞の研究』桜楓社
- 佐治 圭三（1982）『『しなくて』と『しないで』と『せずに』』日本語教育学会編『日本語教育事典』
大修館書店 443-444
- 寺村 秀夫（1981）『日本語の文法（下）』国立国語研究所
- （1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 三上 章（1955）『現代語法新説』刀江書院

（原稿受理日：1996年12月27日）

（改稿受理日：1997年3月2日）

金沢 裕之（かなざわ ひろゆき）

岡山大学文学部 700 岡山市津山中3-1-1